

昭和二十五年九月十五日發行（毎月一回十一日發行）  
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
（通第十八號）

# 慈

# 光

第二卷・第九號

## 目次

蓮如上人御一代聞書抄……………	(1)
佛法を聞く心……………	花田正夫 (2)
念佛は總てなり……………	波岡茂輝 (7)
波岡氏遺詠……………	(14)

## 蓮如上人御一代聞書抄

- 一、蓮如上人を仰せられ候「佛法の義をばよく人に問へ。物をば人によく問ひ申せ」のよし仰せられ候。「誰に問ひ申すべき」由伺ひ申しければ、「佛法にあらば、上下をいはず問ふべし。佛法は知りそ。もなきもの知るぞ」と仰せられ候。
- 一、思案の頂上と申すべきは、彌陀如來の五劫思惟の本願にすぎたることはなし。この御思案の道理に同心せば、佛になるべし。同心とて別になし、機法一体の道理なりと云々。
- 一、衆生をしつらひたまふ。しつらふといふは、衆生の心をそのままおきて、よき心を御加へ候ひて、よくめされ候。衆生の心を皆とりかへて、佛智ばかりにて別に仰したて候ことにてはなく候。
- 一、「この流儀、在家にて建立あるにて、平等繁昌するなり」と仰せ候ひき。
- 一、御膳まいり候時には、御合掌ありて「如來聖人の御用にて衣食ふよ」と仰せられ候。
- 一、佛恩のために名号をとなへて佛にまいらすは換物なり、自力なり。名号となふるは御助けのありがたやありがたやと申すころなり。
- 一、水鳥も上はたのしむやうなれども、足をば油断なくはたらかすなり。信の上はいよいよ讃嘆談合おのすから油断あるまじく候。しかれば讃嘆談合を佛法の慧命と仰せられ候。
- 一、佛法をあるじとし。世間を客人とせよ、といへり。佛法のうへより世間のことは時にしたがひ相はたらくべき事なり。
- 一、行くさきむかひばかり見て、あしもとを見ねば、ふみかぶるべきなり。人のうへばかり見て、わが身のうへのこととをたしなまずば、一大事たるべきと仰せられ候。
- 一、梅干のことをいへば、皆人の口一同にすし。一味の安心はかやうにかはるまじきなり。
- 一、一宗の繁昌と申すは、人の多くあつまり威の大なる事にてはなく候。

## 佛法を聞く心

花田正夫

聖道の教では「見性成佛」とあるように、見るということが大切に教えられているが、淨土の門では「聞其名号」とか「聞即信」とか「其有得聞」というように、聞くということを非常に大切なことと勉められている。このことは、一つは智慧を中心とし、一つは慈悲を根本とする兩教の性格をよくあらわす点だと思ふ。

ここに淨土の高僧たちは聞くことについて細心の注意を残されている。先ず蓮如上人の御一代聞書を中心として、私の心の底に深く刻まれていることどもを拾つて見よう。

第一に、聞きまちがい易いこと。

同時に同じ師から承つても、聞く人々の顔が異なるように心が変わるから、夫々に我身勝手な聞き方におちやすいものである。公園などで手を叩いても、池の鯉は水面に浮び上り、雀はパツと飛び立ち、女中さんはお茶を用意するとは有名な俚言である。

「山科で御法談の時、あまり有り難いので、忘れてはならぬと思ひ、六人で詰し合つたところ、画面にききかえ、そのうち四人はちがつていた。大事なことで、聞きまじい易いものだ」ともあり「御法談のあと、寄り合つて話し合え、必ず五人は五人ながら自分勝手にきくものだ」ともまた「一句一言を聴聞するにも、得手に法を聞くものだから、ただよく聞いて心中の通りを話し合ねばならぬ」と教えられている。

愚鈍の身には、聞き落したり、聞き間違つたり、とかく得手に聞いて、御眞意をよく聞きひらくことのむつかしさを深く自照し、聞法のあとは、互に話し合つて、常にただして貰うことが大切である。

然し我執と我慢と名聞の強い私共は、自分の間違いを直されることを恥と思つて、口を開きにくいものである。そこを見抜かれて、上人は「たがいにものをいえいえ、ものを申さぬ者はおそろしい」とも「ものを申せば心中もきこえ又人にもなおされるから、ただものを申せ」とも「まきたてがわる

い、人になおされまいと思う心である」「小さい聲ではいかぬ、ハッキリと物を言え」等と仰せられている。

また私共の物をいわぬ心の底を観察されて「佛法談合のとき物をいわぬのは、信がないからだ。自分で立派なことを申そうとするからである。よそなるものを探し出して話そうとしている。心にうれいしい事はそのままうれいしいと申すべきであるし、寒ければ寒い、熱ければ熱いとそのままの心の通りをいうのだ。佛法の座敷でものを言わぬのは信がないからである」との切々としたお叱りがある。慈光の爛爛と輝やく、上人の御前に、不信の心を懺悔申すばかりである。佛法の上自分に卑下する心、遠慮心があることは、たしかに自分をよく見せようとする慢心で、くせものである。自分の醜さの類かむりである。冷汗三斗、この醜悪さを本願のよつておこされた本源であるものを！名医の前に出ながらも、尙自分で「今すこし病氣をよくしてから」と思っている愚さである。

第二に、聴聞はいつも新らしくはじめたるように。

私共はとかく、新しいこと、めづらしいことを聞きたがるもので、同じことは、もうよく知つている、聞かなくてもよいと早会得をし易いものである。

「赤尾の道宗は、ただ一つの御詞をいつも聴聞申すのが、初めてきかせて頂くように有り難い」と述懐し、また法敬坊は九十歳まで生きのびて「この歳まで聴聞申したが、これで

もうよいなどと思つたことはない」と述べている。いづれもいづれも尊い聞法者である。

それもそのはず、蓮如上人御自身が「ものにはあくことがあるが、佛に成ることと彌陀の御恩を喜びあいたことはない」とも「佛法にあくことがなければ法の不思議を聞く」とも仰せられ、更らに「安心決定鈔を四十年読み、三度も読み破つたことがあるが、飽くことはない。いつも黄金を掘り出す思がする」と讃歎遊ばされているのだから。

きればよいよかたく、仰げばよいよたかし、とは、眞に道にふかく徹せられた人々の言うに言えぬ妙趣である。説かれる人も、聞き入る人も同一味にとろけた御相に、「よくとくことも難ければ、よくきくこともなほかたし」との親鸞聖人の御和讃が、想い浮んで来る。

思うに、同じことを繰り返して繰り返して御教え下さる方こそ、眞によきひとであり、そのこと一つを何度も何度も、聞いて聞いて聞き飽かず、何時も初事のように味い、そこから無盡の法水を汲みとる人こそ、よき聞法者である。

それにつけても思い合せられるのが近角先生である。三好愛吉先生が白井成允先生に、求道会館での聞法を勧められた時「近角先生は何時も同じことを繰り返して説かれるが、それをただ聞いて覚えただけではないけない。何度きいても一つことが常に新しく味えるようになることが大切である」と御注意せられたそうであるが、誠に有り難い御言葉である。こうした御教に照らされては、聞けば聞いたでそれを覚え

て、賣り物にし、読めば読んだで、早速物知り顔をした、私自身の自己を留守にしている姿が愈々自照せられる。

第三に、かなめを聞き、かどを聞く。

佛法聴聞にあつて、ただおうように聞かず、かなめを聞き、かどをよくききひらかねばならぬ。

また説く人も、さしよせ、十あるものを一つにして、信心とか安心なども別事をいわず、言葉すくなに、きりつめて話せ、と注意せられている。

上人が仰せられるかなめであり、かどとは「一念の信」である。空善にも「一心のところをよく人にもいへ」と教えられ、「一念のことをいひきかせよ、東西を走りまはりてもしひたきことなり」とまでに仰せられている。また「ただ凡夫の佛になることををしへよ、ただ後生たすけたまへと彌陀をたのめといへ」と仰せられている。すなわち第十八願の御ところをくだいて、きりつめ、さしよせて下されて、そこ一つをよくよく味えとの思召である。

親鸞聖人は「聞というは、佛願の生起、本末を聞いて疑心あることなし、これを聞といふ」と訓えられている。

佛願とはもとより第十八願である。この願の生起とは、本願のおこりである。「衆生往生せずば正覺をとらじ」と、われらが願わす、もとめぬにさき立つて、願をおこして下された御めあてである。遠い昔から苦海に沈んで、はてしらぬ流轉をさだめとする外ない煩惱具足・罪惡深重のわれらをこ

そ、その故に願行を成就せんとの本願のおこりである。

佛願の本末とは、本願の成就である。衆生の往生をかけたのにして下された本願が、長時不断の火と燃える願力に成就せられたのである。南無阿彌陀佛と成就せられたのである。

「罪は重く、障は深くとも、願と行は成就したぞ！聞違はなく、かならず救うたぞ！」の御ことである。

本願の生起と本末こそ、われら聞法者の終生きいてきいてききぬかせて頂き、無盡の法水を汲ませて頂く、かなめであり、かどである。

第四に、心得願への御誠め。

私共の我執我慢を中心として久遠このかた流轉している者の常として。何かたしかかなものを掴みたい掴みたいが根本の願である。そこに聞法しているうちに、何か大きな感激とか喜びが出ると、これこそと思いかためるが、それが崩れ去ると又候困つた困つたになる。甚だしいのになると朝三暮四で猫の目のように変るかと思つと、反対に、俺はもうこれで大丈夫、金剛の信を獲たのだ、矢でも鉄砲でも来いといつた風な頑迷な妄信となる。そうしたところに自力の迷執がひそむ。

然し一向に不信であると言つている人には何時かは正信に帰る機会もあるが、俺は間違ひはないと独善独断におちている人には、その間違ひを氣付かされる隙がない。「そこに心得たというは心得ぬなり」の蓮如上人の金言がある。

彌陀正覺の一念をよそにして何処に凡夫往生の道がある

う。このことわりをよく聞きひらくとき、正覺の一念が即ち  
屏命の一念となり、屏命の一念が即ち正覺の一念にかえる。  
塵一つ機にとどまるところはない。機にとどまる時、覺・不  
覺の争いがおこる。

近角先生の御門徒の一老婆が「自分がよいと思うのがわる  
い」と先生の仰を聞いて、夜びいて自分を省みた、ところが、  
自分の何処にもよいところはない、悪ばかりである。  
然し最後に「御信心だけは」という思いであつた。老婆はハ  
ツと胸打たれると共に「これが悪かつたのぢや」となつて大  
懺悔されると共に、うちくだけた有り難い同行と轉ぜられた  
そうである。或る篤信者の詞に「よく聞けや、よく聞けや、  
よく聞いて、よく聞いて、自分に佛法けがチツトもない奴  
ぢやと知れるまで聞け」とあるのを覚えておる。

「水に入つて垢おちず」とも言うが、私自身の佛法者、後  
世者ぶる心のやまぬ、汚れを持ちながらそれをそれと氣付か  
ぬ者への御懇切な御訓である。

第五に、聞きえぬことを歎く者に。

「いたつてかたきは石なり、いたつてやわらかなるは水な  
り、水よく石をうががつ、云々。如何に不信なりとも、聽聞を  
こころにいれ申さば、御慈悲にて候あいだ信は得べきなり。  
佛法はただ聽聞にきわまるものなり」

一説忘ることの出来ぬ上人の御勧めである。晝夜不斷に落

さるのが南無阿彌陀佛の大悲でまします。

第六に、急いで大切に聞け。

他方他力と言いながら、依頼心をたのみとして、無力にお  
ちることは心せねばならぬ。「時節到來ということは用心に  
用心して上のことである。無用心ではない」と強調せられ  
「わが心にまかせて、放縱にならず、よく佛法を聞け」とも  
たしなめられている。又「世間のひまをあけて聞くという  
が、それではなお不足である。世間と佛法が同じ重さである。  
世間のひまを欠いても聞くべき時には聞かねばならぬ」とも  
「世間を客人とし、佛法を主人とせよ」とも示しておられ  
る。

先年逝かれた白杵祖山師の目誌の中に、

「道心の中に衣食ありといつても、道心者が必ずしも衣食  
に不自由しないのではない。道心の中に衣食ありというの  
は、道心即衣食なりとする意味である。だから道心以外に衣  
食ありと思うてはならぬ。ここがよく味えると、たとひ餓死  
しても、道心の食を失わないのだから永遠に自然に満足であ  
る。又たとい凍死しても道心の衣をまとうことになる。」  
と述べられているのに非常に心打たれた、佛法を主人とさ  
れ衣食とされて天壽を完うせられた師の信境に、覺えず襟を  
正さしめられたことである。

人生は無常迅速である。長網を引いてはならぬ、何時何時  
までも親しく手をとつて行きたいのはわれ等の願であるが、

下する水の力で、堅い岩を穿つて行く。如何に不信心な強剛  
難化の衆生も、衆生に隨順し、隨逐し、一子の如く憐愍され  
る大慈悲力に、必ず聞きひらかせて下さるのだ。信の味もな  
くして聞くのは心づまることもあろうなれど、聽聞を心に入  
れて下さるよ、と上人がいたわりかしづいて下さる。

又の詞に「陽氣・陰氣ということがある。陽氣をうける花  
は早く咲き、日陰の花はおくれる。かように宿善にも涉り遍  
いはあるが、兎も角も、信・不信をとわず佛法を心に入れて  
よくきかねばならぬ」とはけまされている。

信友山田さんの一つ話であるが、「私は二十年近く、喜べ  
ない、喜べないが苦になつて、東京の近角先生をお訪ねしつ  
づけて来た。先生は私の顔を見られると、山田さん喜べない  
のが苦になるか。あなたはそれが持病なのだ、と仰せられ  
て、何度御伺い申しても、何時お伺いしても、チツトもおへだ  
てなく色々と実例を引かれ、諭を引かれてお話し下さつた。  
私は自性が自性ですから、先生が一寸でも輕蔑されたり、へ  
だてられたりすると二度とお伺いしなかつたであらうが、先  
生にはそれがチツトも見えなかつた。このこと一つは臆に銘  
じることである」と涙で語られた。

聞いてわかつたの、わからぬのではない、聞きわけける力の  
ない者だから可愛相とお相手下さることが佛の大慈悲心であ  
る。底のない佛法に底を入れてはならぬ。最後の最後まで、  
心の隈々まで、同悲同融して、護りつくして淨土に引接して下

それは煩惱の描く夢である。「佛法には明日という日はなき  
なり、今日ばかりと思え」或は、

「世間のひまを缺いても聞くべきである」

と急がれ「如何に宿善の有無によるとはいえ、述懐のこころ  
はしばらくもやむ時はない」。

と子の帰りを待ちこがれ、ひとえに念じてやまぬ母の慈心が  
そのまま仰がれる。

斯くも御心配おかけ申すのも、私自身が眞に大事を大事と  
知らず、無常を無常と観ぜられぬ、愚鈍さのためである。

第七に、開法の心がおきてもよき人にあうことの難さ。

「如何に宿善熟すとも、善知識にあえないとむなししいこと  
に終る」と、開法の難をあげられている。親鸞聖人も和讃に  
「如來の興世にあひがたく、諸佛の經道ききがたし、菩薩  
の勝法きくことも、無量劫にもまれらるなり」

善知識にあふことも、をしふることもまたかたし、よくき  
くこともかたければ、信ずることもなほかたし」

とよき師にあいまつることの難さを歎せられている。無明  
の涯しない大海に浮び出た盲目の亀こそ、われ等の姿であ  
る。西も東も、何処に浮木があるか、那辺に鳥影があるかも  
知れぬ身である。石童丸の故事のように、はるばる九州のは  
てから高野の山に、父を求めたものの、恋しき胸に溢れなが  
らも、名告らぬ父の情なさ、泣く泣く下る外はなかつた。  
それにつけても池山先生が六高の独乙語の教授をせられて

いた頃、独乙の哲人ニイチエのツアラストラを引用されて  
「人間が経験し得る最も偉大な経験は、自己を見さげはて  
ることである。その利那、今迄立派なこととしてまもつて來  
た道徳も唾棄すべき汚物と化し、自分自身が、得体の知れぬ  
掴みどころのないカキ同様なものであると自覚するであろう  
云々」

と巧みに訳されてのち

「これ程までに自己の姿が知れているニイチエが、彌陀の  
本願をきいたら、親鸞聖人にあえたら、否、歎異抄が手に入  
つていたらなあ」

と長歎せられた風手までを思い併せられる。われ等愚鈍  
の身をもちながら、よき国に生れ、よき聖人の教にあわせて  
頂いたことである。

遺稿

## 念佛は總てなり

波 岡 茂 輝

私は、有識者と云われている人が、次の様なことを言つて  
るのを度々聞く。

然し信仰は心靈の問題だから、信仰だけでは生活は出來な  
い。生活は生命維持の問題で衣食住等、経済的、現実的なこ  
とで、信仰より別に生活の道を構じなければならぬ。飢え渴  
く者に聖書も經典も何の役に立たない。

特に淨土教は後生の大事を説いて、今生きている人間には  
ほとんど關心を持つていない。遠い遠い、しかもその存在さ  
え分らぬ死後の地獄・極樂などは、人生にとつて逼迫した問  
題でない。生活は今、只今の問題で、一刻もほつておけない  
焦眉の重大事である。信仰などは生活に苦勞のない人のする  
ことで、自分も生活にゆとりがある時には求めたいと思つて  
いる」

これは宗教について多少の智識もあり、信仰の大切なこと  
も知つてはいるが、眞の信仰のない人の言う間違いで、次の  
三点に大きな誤解がある。

- 一、信仰を道徳実践の方便であるとする
  - 二、信仰と生活は異なる立場にあるとする
  - 三、信仰を以て死後の世界の幸福を得る爲のものとする
- 要するに本當に信仰をえていないから起る哀しい誤謬であ  
る。

○ 第一の問題に就いて述べよう。

阿彌陀佛の大誓願は、煩惱具足、罪惡不淨の凡夫人をたす  
けて往生を遂げさせ、佛に成らしめられるというので、即ち、  
凡夫直入・惡人正機の道である。

蓮如上人は御子様「たとえ木の皮を着ねばならないまで  
に落ちぶれようとも、決してそれを淋しがつてはならない。  
身に持つ業報ならば何時どんなことになるかは知れないが、  
佛法におあい申したことを思えば、これにましたよろこびは  
ない」と遺訓されている。萬感まことに迫るものがある。

以上蓮如上人の慈訓の一端を拜誦して、愈々知らされるの  
が、常に常に御言葉にそむき、曠劫以來の見はてぬ夢に惑わ  
されて、去つて歸らぬ生命の時を、空しく迎え、徒らに送つ  
て、事毎に己はよしとかしこげに振舞つて、恥を恥とさえ感  
じ得ない、無懺無愧の業さらしのわが姿である。

南無阿彌陀佛

「信仰は心をやわらけ、道徳を進め、欲心から離れ、人格  
を高めるので、誠に尊いに相違ない。

「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべ  
き善なき故に、惡をも恐るべからず、彌陀の本願をさまざま  
る程の惡なきが故に」

とある。本願の大明に照らされると、我等が考える、相  
対的な善惡はあだかも、太陽の前の行燈のようなものになら  
ない。しかも自己中心の善惡は、多くは利己的なもので、善  
がはたして善か、惡がはたして惡であるか、徹底的に判断す  
ることも出來ないことで、つまるところ、そらごと、たわこ  
とと申すほかはない。

然し生れおちると、よいの、わるいので相對善惡の世界し  
か知らない我々は、何処までも薰習しきつた善惡にかかづら  
つて、よくなってはならないと執着している。

「自らの計をさしはさみて、善惡の二つにつき住生の助け障  
り二様におもふは、誓願の不思議をたのまずして、わが心に  
住生の業をはひみて申すところの念佛も自行になすなり」

善行は住生の助けとなり、悪行は障りとなるなどと考  
えて、念佛申しても住生の助けをする心根であるから、眞実の  
淨土には生れられない。

「信心の行者、自然に腹をも立て、惡ざまなることをもお  
かし、同朋同侶にもあひて口論をもしては必ず廻心すべしと  
いふこと、この條、断惡修善のこころか。一向專修の人に  
いては廻心といふことただ一度あるべし」

善惡に固執して、自ら住生の大益を失うばかりでなく、他  
に向つても、あれではいかぬ、これでは駄目と、冷酷な批判

をつづけることが、善悪を簡ばれない絶対承認の大悲をよそごとにして、断悪修善の自力のはからいに執する姿である。一たび念佛に帰すれば、三世に渡つて住生に支障を來さない、決して善行のあるものだけを助けるという誓願ではない。

「悪からんにもつけても、いよいよ願力を仰ぎまいらせば、自然のことはりにて柔和忍辱の心も出でくべし。すべて萬の事につけて、住生には賢き思いを具せずして、ただほれほれと彌陀の御恩の深重なることを常におもひ出しまいらすべし、しかれば念佛も申され候」

信仰はその結果として自然に人の心を柔和にならしめ、所謂、貪瞋痴の三毒の猛威も次第に薄らぎ行くべきは当然だと思ふ。然し信仰を獲、念佛を称えさえすれば、誰しも道德堅固の人格者になれると思ふのは誤である。

世間には自分の行動について少しも反省することもなしに、信心者のすこしの悪業でも見逃さず、信仰ある癖に、念佛を唱える癖に、などと責め立てるものがあるが、これは自己の凡夫であることを知らず、信仰の如何なるものかを弁えない氣の毒な人と謂わねばならぬ。

我等には業報がある。善事を励もうと願いながら、ついに惡事に陥つてゆく。これは人間の矛盾で、これがあるがために佛陀の慈悲が懐しいのである、誓願も信じられるのである。

この缺陷は自我のある限り、肉体の亡びざる限り、現世に生命をもつ限り、決して清算されるべきものではない。たとい信

会兵同生活に餘儀なくされたり、又其の時其の場の思い付きでやつたのでは所謂「人心惟れ危し、道心惟れ微なり」の通り、誠に淺薄であり、あぶなかしきもので、眞剣に活きようとずる人は到底そんな道徳には満足して活きて行けない。

「海河に網をひき釣をして世を渡る者も、野山に猪を狩り鳥を捕りて命をつなぐ輩も、商をもし田畠を作りて過ぐる人もただ同じことなり。さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべしとこそ聖人は仰せさふらひしに、當時は後世者ぶりして、善からん者ばかり念佛申すやうに思ひ、或は道場にはり文して、何何の事したらん者をば道場に入るべからず、なんどいふ事、ひとへに賢善精進の相を外に示して内に虚假をいだける者か……」

これでこそ人間性を見抜かれ、凡夫大衆の救われうる宗教である。念佛は愚者悪人を正機として、自力を捨てて他力を頼む凡庸人こそ第一番に助けられる。善事を行つて後に信する本願でもなく、善事を行つて爲の念佛でもない。かの後世者ぶりして唱うる念佛、善人ぶりして抱く信仰の如きは、空念佛・似而非信心で殆んど論ずるに足らない。

要するに信仰は必ずしも善を行じ悪を作らぬのを目的とするものではない、寧ろ却つて小善さえ徹底的に行い得ないものの理想を実現する道であり、彌陀の五劫思惟の本願は宿業にしほられてどうともして見ようのないものへの救済であり、我等凡人がいくら勵んでも自力によつては決して住生がかなわぬものを、本願を信じ念仏申すことによつて住生が

仰は獲ても、自然のことわりに催されない限り、宿業は拂い除こうとしても、牢固として抜くべからざるものである。善を修め、惡を断とうなどと、是非・善惡の分別をさしはさまず、善につけ惡につけ、彌陀の絶対の慈悲にひたりつつ、しみじみと救済の尊さを味うことこそ眞の信仰といふべきである。

自然に陥る惡業ごとに心機一轉して行かねばならぬとしたら、我等凡愚の者は朝から晩まで心機を轉換させていなければならぬ。これでは信仰は救済でも、安心でも、法悦でも歎喜でもなく、かえつて心の動乱焦燥にしか過ぎない。まして氣すかぬ間におかしている惡業はいくらあるか判らない。この罪惡の爲に地獄におちるのなら、私などは先ず第一番に三惡道をまぬがれない者である。それでは無限の慈悲も遍照の光明もそらごとになる。

信仰はそんなものではない。信仰の生活は善惡を超越した念佛を絶対善とする世界に生きること、念佛者から言えれば、お任せの生活、計いのない生活、不思議不思議の生活であるが、之を世間的の眼を以つて他の人から見れば、立派にその人一杯の力で善事を励んでいるのである。たとい惡業が行われても、悍然と無責任な考えからやつていのではない。止むに止まれないで行うので、言わば小兒の惡事にも似たものであつて、上への飾りにすぎない善行美言よりどんなに優つているか知れない。

道德も概念に支配せられたり、何者かに牽制されたり、社

逐けられる。業報によつて作られる己の罪は毫も恐れるに足らないし、宿業催せば入信後と雖も惡業はのがれられぬ、而もそれによつて却つて念佛申され、佛恩もしみじみ有り難く思われるのである。

かの信仰は道德の爲に存していると思ひ、或は信者の惡を非難せんとするのは、思わざるの甚しいものである。

○ 第二の信仰と生活は別ということに就いて。

そもそも他力の信仰とは、我等の全身全靈が阿彌陀佛に依すること、念佛と一枚になり念佛以外に何物もなくなることである。頭は念佛で、手足が之にはなれていられるのではない。口に唱名しながら行動が自力根性に左右されているのでは眞の念佛でない。世法は世法、佛法は佛法で別々になつていられるのでは純一な信心ということが出来ない。生きようが死のうがお任せきりで生き、食えようが食えまいが計らなく生きるのが無義を以て義とする信仰である。念佛は念佛でいいが死んでは困る。食えないでは困る。だから念佛の外に我々の生きる道は求めねばならぬなどという考えは全く純眞な信仰をぶち壊すものである。生きることが出来ず、食うことが出来ないからこそ大慈大悲の誓願にすがつたのである。それが信仰と生活が別に考えられるのでは何処に徹底したお任せがある。

然し我々煩惱熾盛な平凡人にとつてはいくら信仰があつても、念佛を唱えても、やはり死ぬことがいやだ、食えないで

は困る。特に自分を杖とも柱とも頼んでいる妻子でもあつた場合には貧困におびやかされたり死に悩まされたりした時には心が焼けただれる程あせりもだえる。恐らくこうしたこと私の死ぬまで免れない事であろう。総ては悟りきれない凡夫人の所爲である。然し、それだからお前もお任せきりではない、本當に念佛になり切つていないとするのは早計であり誤解である。吾々の信仰は、吾々がこうした煩惱を断じ得ないからこそする絶対の救済なのである。吾々は自分の断ち切れない頑迷な執念を省み、つぐのい難い利己心を思い、謬大妄想的なうぬほれに氣付き、よくよく自分のなつていないのに困り切つた斷末魔に、我等の如き凡夫人を助け給いつつある佛陀の慈愛を仰ぎ本願にすがつたのである。信心を得ても又後もどりしては又氣付いて感謝の思いにひたるのである。決して本當の念佛は信仰と生活と別なものではない。

信仰とは誦經することでも寺参りすることでもない。佛前に香を焚き花を手向け、又は寺院を建て、僧侶を供養することでもない。之等の儀式的なこと外形的なことは皆、信仰から派生的に起る第二義的なもので、信が中心にあつてこそ尊い。儀式のための儀式、形式のための形式に過ぎないなら、それはどんなに盛大でも、莊嚴でも無功德である。否、却つて煩惱の火に油を注ぐようなことになり勝なことである。

若し信仰が、誦經や、寺参りや、佛事法要や、布施をすること、之をおろそかにし、なおさりにしては信仰に缺ける処があるとすれば、成程、無学者、貧乏人、朝から晩までキ

リキリ舞して立ち働かねばならぬ人には没交渉なものである。有閑者金持の遊戯道楽にしか過ぎない。それでは人間大衆にとつては用事のないものである。

信仰は如何なる人にも、如何に無智の人にも、老少・善悪・貧富・貴賤を問はず、あらゆる人の心に平和と自由を感じせしめ、法悦と歓喜を興え、金剛不壞の念に住することを感ぜしむるものでなかつたら、人間社会にとつて無用の長物である。むしろ社会を更に暗黒ならしめる有害物である。

然し、本當の信仰は全人的に念佛に融合して、すこしの自力をも交えない、純一無雜である。信仰の外に佛法も世法もない。我もなく彼もなく、是非の論を絶し、善悪の見をこえた境地である。信仰は実に信仰のためにのみ存し、決して他の何物にも支配干渉され拘束掣肘されるものでない、独自絶対のものである。

私共にとつて念佛は全生命である。総てである。念佛の外に何の思案もなく、何の行動もない。一舉手一投足にも念佛である。日日の生業につくにも、飲食起居するにも、父母骨肉に接するにも、隣人社会に交るにも、悉くこれ念佛の発露であり、信仰から流れ出するものである。若し念佛の外に立つて社会道徳を思い、家庭道徳を思うても、それ等は皆上への裝飾で何等の生命もない。無意義のものである。若し一步念佛からはずれたら、釈迦彌陀二尊の憐みにもれ、神佛の冥助にも見放され、空しく妄念妄執の虜となり、惡魔外道にさいなまれ、必定地獄におちるのみである。

おろかなる身こそなかなか尊けれ

彌陀の誓のありと思へば

という良寛和尚の歌がある。和尚の「愚」と言われたのは必ずしも學門智識をのみ指したのではない。才能でも、世渡りの術でも、道徳的行爲にかけても、暗愚拙劣であることを十分反省せられての歎声であるうと思われる。そしてその愚者が彌陀の慈光に照護せられての歓喜の述懐である。勿論私には和尚のような脱俗清淨な生活は出来ない。唯愚者にとつては念佛は唯一の人生であり、生活であることを主張せんとして和尚の歌を引出したまでである。

何事につけても生死を解脱出来ない、執着の我等は生きたい一杯で色々の生活手段を講ずる。むやみに金を求める、守銭奴があり、他の給する俸給に依食する者もあり、治るといふことを信じないながら藥を賣る医師あり、負けることを承知で引承ける弁護士あり、人の目を暗ましてもなお儲けようとする実業家がある。甚しいのは泥棒人殺までして生きようとする者さえある。さるべき業縁が催せば如何なる惡業をもしないと限らない。反省して惡事が止められるならこれにこしたことはない、喜ぶべき、尊いことであるが、それが止められない程の宿業の者も、ひとえに本願を信すれば救われるのは他力の尊さである。惡事のやまぬにつけてもひたむきに本願をたのまねばならぬ。

一度信心決定すれば吾等の行住坐臥、如何なる生計も職業も、それを意識するとしなかに拘らず、悉く念佛である。世

法も佛法も盡く念佛である。実生活をよそにして念佛の存立する餘地がない。かくて自然の道理にもかなわば柔和忍辱の心も湧き出るであろう。

「妄念はもとより凡夫の地體なり、妄念の外に別に心はなきなり……。妄念のうちに申しいだしたる念佛は濁にしまぬ蓮のごとくにて決定住生うたがひあるべからず」

と妄念妄執の吾等は念佛に生きてこそ始めて欲する処を行つて、しかも生き甲斐のある生活を送り得られるのである。

第三の信仰は死後の幸福の爲とする誤に就いて。

そもそも地獄極樂の存在は、誰でも肯定せねばならぬものだと思う。因果律を正しとする者は現世においてだけでも地獄極樂の存在を肯定しようし、更らに靈の永遠性を信するものにとつては來世の地獄極樂の存在に就て疑をさしはさむ筈がない。

善因善果、惡因惡果は動かすべからざる自然の鉄則で、吾等の現在うけている禍福・賢愚・貧富等々は、過去において、何かこれを將來する原因があつたからの結果で、因のない果はあり得ない。又現在の云爲行動は未來の原因となつて、それ相当の結果をいつか收獲せねばならぬ時期があるに相違ない。

世間には目に餘るほどの惡事を行い、破戒無慚の振舞をやりにながら、なお人の羨むほどの幸福榮華をしている人もあつて、因果律も疑わしいような例も少くない。然し人生は僅に

五十年に過ぎない。現在の因がまだ果を結ばず、過去の業因によつて現世を樂み得ても一生を終つた後に必ず惡果をまぬかれないのは因果律の大磐石である限り、儼然として動かすべからざる道理である。

地獄極樂は要するに現在に作つた善因によつて來生に於いて果報をうけるところを極樂といひ、作つた罪によつて落ちるところを地獄という。惡に種類があるように地獄にも色々あり、善に種々あるので極樂にも眞土、化土がある。

扱て吾等辛苦艱難よりは、安樂幸福を求めらる。地獄より極樂に生れたい。それにはどうすればよいか。因果應報の鉄則の示すように現世に極樂に往けるだけの善業を積まねばならぬ。斷惡修善はもとよりのこと、布施・持戒・禪定等の六度を實行し、最高の理想を實現して、佛の如く慈悲深く圓滿に、佛の如き眞の智慧が出なければならぬ。

然し斯る難行は果して誰が成就出来るであらう。法藏菩薩でさえ五劫の思惟、永劫の修行があつた。全く人間の力で如何ともなすことの出來ぬ程のことである。凡庸愚鈍の吾等には夢にだに及びもつかぬことである。

「自力聖道の菩提心ころも言葉もおよばれず」と親鸞聖人の悲歎されたのもそこにあつた。やらずに出來ぬではない、二十年やりにやられた結果の御叫びである。

世の所謂宗教學者、哲學者、傳道者、必ずしも往生の機ではない。たとい精進勇猛な善人も六欲にそそのかされては折角の努力も破綻し、千仞の功を缺いてしまふ。善人學者とて

往生の一段では難中の難、悉く手の施すところがない。ましてや勝他・名聞・利養の欲望切にして、惡業を恐れながら起し、善根を現わさんとすれば得ること能わぬ吾等凡夫には、奮闘努力しても自力を以てしては往生は到底不可能事である。

唯幸なる哉、凡夫直入の他力の悲願を信すれば、吾等出離の途絶えた身も、難中の難たる往生が容易に出来るのである。

然し、念佛は極樂往生の爲にするかというに決してそうではない。念佛と往生とは功利的にも對立的にも考うべきではない。念佛が業因となつて、求めざるにおのづから安養淨土の果を結ぶので、端的に言えば、念佛の中にすでに往生の大功德、往生の大利益がおのづからこもり、必ず往生せしめられるのである。即ち念佛と往生は唯一不二。念佛が終つてあつて、念佛以外に何物もない。阿片に癡痺したように、現在は頰被り、とも角も過し、遠い死後の世界の幸福の爲に念佛するのでもなければ、又現在の自分と何等關係なく、さほどに幸福な極樂なら是非生れようとする念佛でもない。お任せきりの念佛、計のない念佛に何の往生の沙汰があらう。

「往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきにあらず、ひとすぢに如來にまかせ奉るべし」とも「たとひ法然聖人にすかされ奉りて、念佛して地獄におちたりとも更に後悔すべからず候」とも仰せられてある。

要するに私としては知識として、或は理論として地獄極樂

を言うが、実感としては地獄・極樂はピッタリと來ない。淺薄浮腫の性の爲か、親鸞聖人の様に「地獄は一定住み家ぞかし」と、自ら省みて、おそれ、おののくようなことはない。犯した罪惡でも自ら責めることは頗る寛大で、それが多少自責する場合でも、現在の此の身が恐ろしく感ぜられ、あきれ

はてたものに感ぜられるだけで、その應報たる地獄に就いては殆んど無關心である。私にとつて、この深重なる罪惡に心冥み、熾盛なる煩惱に心鈍り、出離の望どころか、地獄極樂さえもピッタリと感得出來ない者の爲の念佛である。勿論極樂の幸福を考えた功利的の念佛ではない。

### 波岡茂輝氏遺詠

何事か成し得べしとの夢さめて

あやまり果てし後に道あり  
我が如き思ひあがれるさがしらを

たすけたまはむ弘誓なりしか  
源の濁れる川もひたすらに

海にそそぎておのすから澄む  
日輪はたださんと輝けり

をさな兒の母のふところにあるがごと  
み佛にただにまかすべかりけり

ちちちちと鳴くより他にすべしらぬ  
小鳥をかひていとほしみけり

向日葵の陽をしたふごと我がこころ

大なるものしをひたす  
葉鶏頭の苗は二三寸延びにけり

紅に燃ゆべき色すで見ゆ  
わだつみの廣きをのぞみ大空の

高きを仰ぎわれ岸に立つ  
我が靈もかくあらまほし大海の

水平線にのほる朝日子  
大海に一掬の水をへしごと

我が世に交り生きてありけり  
大き泡と小さき泡とゆく水の

流るるままに流れゆくなり



# 編集後記

「暑い寒いも彼岸まで」とか。やがて各地に法會が催され、夫々に信味豊かな秋を迎えられることでしよう。私は相變りませず閉戸閑人の療養を續け、信友の法信に、同朋の御來慰に合掌申して居ります。

ことにこの痼疾の身に御同情下さいました諸大士、法師方の御加護と御念力により等寺の附近に一道庵を御結び下さいまして十月半ばにもなりましたら移らせて頂くことになりました。

八月中旬、岐の不破郡表佐村の念佛庵主多實重治医師の御來慰をいただき、お世話は何十年と聞法の末、御長男(名医大御卒業)の戦死と引き續いての家庭上の問題の渦中に立たれて始めて、人生の無常と不如意を痛感されると共に、一昨年頃から大起招喚の御聲が聞え初め只今では「そのままと聞く度ごとに涙哉」と隨喜遊される御姿に接し、鬼の眼の私にも涙させられました。

破屋方丈の室に諸大士の御慰問を蒙り、病にまけては愚痴にかえる私、妄執にからんではあせり續ける私を、佛陀奔哀の御廻向により、引きもどされ引きもどされては念佛させて頂くことであります。

△「佛法を聞く心」は蓮如上人の御一代開書

を拜讀申しつつ、開法の上の御慈訓を中心に、私の心底に刻まれたことを誌させて頂きました。目下は上人が四十年繰り返された安心決定の意譯をさせて頂いています。

「何度繰り返しても何時も黄金を廻り出す思いがする」  
との上人の御信味の一端にも触れさせて頂く端緒にさせて頂く積りであります。

△「念佛は總てなり」の波岡氏の御遺稿は、このままに埋もれることのあるにも勿体ないことと思ひ、記載させて頂きました。

波岡氏は東本に御在學の時、食學生には求道學舎がよいと輕い考から入舎せられ、その際近角先生から數異抄を教えられたのが端緒で、その後朝鮮で女學校の校長をしておられた頃、女教師が二人自習したことが動機とな

り、果遂の普願力に催されて、信華目出度開くこととあります。

本文は現代の知識人と稱せられる人々の宗教に関する考え方の迷妄を完全に破つて、念佛一つに一切の解決せられる點を力説して下さつてあります。可成り熱心なと思われる念佛者でも念佛と生活が別々になつて、い

は誠にいたましいこととあります。

昭和二十五年九月十日印刷  
昭和二十五年九月十五日發行  
毎月一回十五日發行  
定價 一部金拾五円(郵稅共)  
一年分金百八拾四(郵稅共)

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九  
編集兼 發行人 花田正夫

名古屋市千種區千種町馬走二八  
印刷所 千草印刷所

名古屋市昭和區內幸樂町二ノ二九  
花田正夫方

發行所 慈光社  
振替口座番號 名古屋一〇四七〇番

慈光第二卷第九號 昭和二十五年九月十五日發行(毎月一回十五日發行)  
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可